

B. 遊びの中に「科学ある心」がある

B-1. 「蒲鉾板で遊ぼう」

八幡東幼稚園（福岡県北九州市） <4歳児・7月中旬～下旬>

7月に入って水遊びが活発になると、シャボン玉やシャワー遊び、舟作りなどを喜んでし始めた。そのために、ヤクルト容器やペットボトル、発砲スチロール皿など身近な素材を準備して提示した。

そのときに舟作りに使うかもしれないと準備した蒲鉾板20枚ほどで、幼児がおもしろい遊びを始めた。蒲鉾板を並べたり、積んだりして遊んでいる様子から、ブロックや積み木とは違う構成遊びをしていることに気付いた。

そこで、幼児の科学する心を育てるよい自然素材だと考え、同じ形、厚さ、重さの蒲鉾板をたくさん準備した。それを見た幼児がイメージを広げながら遊びを発展させていった事例である。

実践

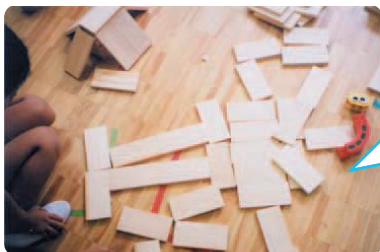
幼児の活動

幼児の姿（行動、表情、言葉）

教師の読み取りと援助

蒲鉾板を並べて遊んでいるうちにロボットのイメージが湧いてきて、自分のイメージを具体的に表現して満足している。本児の思いに寄り添って共感しよう。

蒲鉾板でロボットを作る。



「先生見て！
ロボットができたよ。
すごいでしょ。」
考える 満足感

蒲鉾板を打ち合わせて音を出して遊ぶ。



「火の用心！
カチャ、カチャ、
カチャ！」
感じる、気付き

蒲鉾板に出会ったとき、2枚を打ち合わせて音を楽しんでいる。出た音が心地よく本児に響いて、満足感を味わっているのだろう。

遊んでいる姿から、「気付いたり、考えたりする」という科学する心の育ちが見られた。そこで、遊びをもっとダイナミックにできるように、イメージの広がり求めて、多量の蒲鉾板を準備し、意図的に提示した。

迷路を作って遊ぶ。

多量の蒲鉾板に出会って歓声をあげた幼児たちは、それぞれ持てるだけの蒲鉾板を持って広い場所へ移動する。

あちこちで一人ずつの迷路作りが始まり、やがて友達とつながり、2～3人の遊びと変化していく。作りたいイメージをそれぞれが出して試していくことを楽しんでいる。何度でも気軽に作り替えられ、その度に形が変化するので幼児の興味を引きつけているのだろう。



2～3人の友達と一緒に迷路を作って遊ぶ。

「Mくん、こっちに曲がっていい？」
「いいよ。ぼくこっち側にいくから」「いいね。違う道にして、後で合体しようね」「OK！」
考える 感じる アイデア めあて 試す

一人で迷路を作って遊ぶ。



「僕の迷路、
ギザギザ迷路よ。
まだまだ続くよ。」
考える 夢中 試す

並べていく活動から、積み上げていく活動へ変化し始めている。蒲鉾板を縦に積んだり横に積んだりして、自分のイメージにあったものになるように構成しているのだろう。

家を作る。

繰り返し遊ぶ中で、平面的な構成から立体的な構成へ変化している場面や幼児のアイデア、めあてを認め、満足感を味わわせていこう。

真剣な瞳、蒲鉾板を
そっと丁寧に積んでいく。
夢中 めあて 挑戦 工夫



高く積んで遊ぶ。

「Kくん、
こうした方が倒れないよ。」
「そうかな？」
三角ばかり(三角形に積んでいく)
の方がいいんじゃない。
そうしたら、すぐに倒れたよ。」
「そうかな？やってみよう。」
意欲 考える 試す めあて



「先生見て！すごく高いでしょ。
Kくんと二人で力を合わせたよ。」
「そうよ、写真撮って！」
「これ、タワーなんだよ。中から見れる
ようになっているんだよ。
すごいでしょ。」
アイデア 協力 挑戦 満足感



「Fくん、今度は僕の番だよ。」
「そっと積んでね。」
「さうとう高くなったよ。」
「わあ、ドキドキする。」「届かなくなったら、
積み木持ってこようね。」
「絶対、先生より高く積もうね。」
「うん、頑張ろうね。」
好奇心 試す 挑戦 めあて



高く積むというめあてに向かって4歳児のこの時期でも協力して作っていく姿が見られる。
もっと高くと積んでいると音を立てて崩れ落ちる。がっかりするどころかその音も心地良く感じている。何度でも挑戦する姿を認め、心が動いている様子に共感して意欲を高めよう。

考 察

- この活動以前には、いろいろな自然素材に対して教師のもっているイメージを幼児に押し付けていたのではと反省した。素材の特性を掴んでおくことが大切であるが、どう使うのかについては、先入観を持たずに提示していく自由さをもたないといけないと感じた。
- 材料の質や量で遊びが変化したり、発展したりすることがこの活動を通して良く分かった。教師が繰り返ししかかわっていけるような十分な時間を保障し、幼児の思いに寄り添うような援助を行いながら、満足感が味わえるような言葉かけをしていくことが大切だということを痛感した。
- 「気づいたり、考えたりする心」「めあて」に向かって考え続ける心」「アイデアを出し工夫する心」など幼児の科学する心が育っていることが良く分かった。日々遊んでいる幼児の姿の中から、幼児の興味や関心を捉え環境を準備していくと、幼児は心を動かし、脳を動かして、自分から遊び込んでいくことが分かった。

ポイント

活動の中で、保育者は「蒲鉾板」という素材に対して大人が持っているイメージを押し付けず、子どもたちが自由に遊びを展開する様子を、時間をかけて見守っています。子どもたちの興味や関心を捉えた保育者の適切な援助や環境の準備によって、こどもたちが自ら工夫し、挑戦するなど、遊びを深めていく様子がわかります。